

一幼児の場面緘黙の行動記録と 原因究明及び治療*

帆 足 喜与子**

1940年終り頃から1950年代にかけて、緘黙症に対して関心が向けられ、原因についての解明よりもまず、現実的必要から、症状に関する報告と治療への模索的試みがなされた。場面緘黙はその名称が示すように、だんまり行動が場面を選んで行なわれるのであるから心因性であることは明らかである。いくつかの研究にあらわれた症児の個人調査をみると、知能は総じてそれほど高くないといわれている⁽¹⁾。また多くみられる家庭的状況として祖父母の同居例が相当多い。

いずれにしてもケースによってあらわれる緘黙という現象そのものも具体的な点で殊の外多岐にわたり、発症原因及び症状の基本的メカニズムを同定することは未だ困難であるように思われる。

〔本研究の目的〕 一幼児の場面緘黙の観察記述と原因究明を主とし、治療の試みを行なう。

〔対象児〕 A (女児)。家庭は父、母、妹(丁度2才年下)の4人家族。本児は幼稚園入園当初4才3ヶ月であった。父は公立大学出。一流企業につとめる。母は短大出。両人は職場結婚。

〔行動記録〕

入園1年目 入園後、6月中頃まで毎日、園舎に一步足を踏み入れると「おかあちゃん、おかあちゃん」と泣き叫んで、玄関から逃げていこうとした。それをひき止めると部屋中につばをはきちらしたり、手足をバタバタしてさわぎ、時としては椅子や物を投げてあばれることもあった。

何と話しかけても、何をしてやっても泣き叫ぶだけで一言も物を言わずひどく拒否的であった。ただし保育中逃げて帰るといようなことはしない。名簿を呼んだ時の返事は、在園中の2年間遂に一度もなかった。

幼稚園の門を出ればふつうにしゃべるのである。

6月中旬以降、活動内容(絵画製作・絵本・紙芝居をみるなど)によっては、友達の作業を見たり、聞いたりして、泣く時間が少なくなった。が相変わらず自分から動いたり話したりすることはせず、同じ場所に立っているだけであって、保育に必要な準備や仕事は、すべて保育

* Causes and therapy for elective mutism: a case study

** HOASHI, Kiyoko

者がしてやっていた。

この頃は入園当初のように、人からしてもらうことに対してイヤがらず、むしろ待ち受けているようである。保育者の姿が見られないと、その場でキョロキョロ捜している様子が見られた。長い夏休み後の9月からは、1日も泣かずに毎日登園してくる。

幼稚園でも運動会という行事が行なわれる為活動が多くなったが、以前同様動かない。しかし一対一で、時間をかけて同じ指示を何回も繰り返して言い、一緒に手伝ってやると、ゆっくりと保育者と同じ動作をしようとするしぐさが見られた。活動量も多くなり、幼稚園にもなじんだであろうからと、他の子供への影響を考え、それまでひと口も食べないお弁当の件で母と話し合った。その結果、お弁当の時間に、妹がお弁当をもって年少児の部屋からAの部屋へ移ってきて、向いあわせに坐り、食べさせようと試みた。しかし効果なしであった。

見られると恥しくて食べられないから、皆から見えない所（ピアノのかげ）で食べさせてほしいという母からの希望を実行してみた。その結果二日間は、牛乳は飲まず、お弁当の好きなものだけを食べてあったが、三日目からは、牛乳もお弁当も全部食べるようになった。

しかし半月位特別扱いを続けていると、他の子どもへの反響が好ましくなく、クラス全体のスムーズな活動にも支障を来たすため、別に食べることを中止した。そのため以前のように食べない毎日にもどった。

その後、一ヶ月程たった11月下旬、作品展準備の為、合同保育（縦割保育）が始まり、他のクラスの友達から、色々な点で批難を浴びるようになった。特に、お弁当を食べないことが、とても不思議がられた。その為、今度は、こちらが、口の中に、むりやり入れてみた。その結果、口に入れた物は、順番に、モグモグ食べるようになった。

その翌日より、2学期いっぱい（半月程）、口に入れてやると食べるようになった。年が明け、三学期に入ると、以前より、いくらか自主性が見られるようになった。

お弁当も、食べ物も、フォークにさしてやると、自分で持って、口に運んで食べ、毎日、ほとんど残さず食べるようになった。昼食後のはみがきも、ゆっくりではあるが、自分でするようになった。

そして、そのはみがきをしている最中、一度ひどいびんぼうゆすりが始まった。おかしいと思い、すぐトイレに連れて行った。ところががまんをして、10分ぐらい、がんばっていた。しかし、がまんしきれなくなり、とうとう、幼稚園入園以来初めて、排泄した。

その後、同じ事が、2月初めにもあった。一年間に、この2回しか、園では、排泄しなかったが、数回、おもらしをした。

このトイレの件が、きっかけとなったのか、こちらが言うことに対しての、返事がかえってくるようになった。

返事と言っても、言葉ではなく、手をにぎったり、離したりの方法である。

こちらが言ったことに対して、“Yes,”ならば、手をぎゅっとにぎる。“No”ならば、手を離す約束を、保育者との間に決め、意志を問う時に使うようにしていた。

こうして教師との心のコミュニケーションができるようになってから動作が速くなっていくらか表情が和らぎ、絵本や紙芝居を見ていて、楽しい時には、うっすらニヤニヤと笑いを見せることも、何回か見られるようになった。

保育に必要な事に対しては、一対一だと、すべて自分で行うようにはなったが、言葉がけをしたり、すぐそばに行ったりしなければ、やはり、何もせずその場で立っているだけである。

<友人との社会的関係>

一学期は、ほとんど泣いている状態だったので、友人との関係は持てなかった。

二学期に入り、運動会競技を通じて友だちに世話をしてもらっていた。しかし、だれでもいいわけではなく、自分なりの、好みの友達がいたようである。と言うのは、もちろん、男の子よりも女の子の方が良く、その中でも、性格的に、強い子供は、好まず、優しく接してくれる特定の女の子を、決めていたようである。クラスの他の子供も、何ヶ月か、状態を見ていて、ちょっと、皆とは違う様子がわかっていた為、Aの組が負けるとAちゃんの責任で負けちゃったんだと文句を言った。しかし他の事に対しては、いじめたりせず、手をかして、助けてあげる事が多くみられた。室内遊びの時など、ぬいぐるみを持って来てあげたり、なんとか仲間に入れようと、誘いにくるが、反応がない為、自然に去ってしまっている事が多かった。

<家庭内の様子>

園では、一斉活動に参加しないが、家に帰ると、その日、園で行った事を、母親に、細かくすべて話し、それと同じ事を、やりたいと要求し家庭内で、できる限りの事を行うのである。製作物、絵画などは、家に持ち帰って行うのである。

<一年間幼稚園にいる間に良くなったこと>

- 泣いて登園拒否を起こさない
- 何回か時間をかけて指示すれば、自主的にやろうとするしぐさがみられるようになったこと。
- お弁当を口にしなかったが、途中より、食べるようになったこと
- 自分の要求を、自己表示（手を握り返すことによる返事）によって表わすようになった

<入園一年間の母親の特徴>

入園数日後、おはようブックに、その日の出席シールが貼っていないと、帰宅後、雨の降る中、子供と一緒に、大声ではいつてきた。その時、「うちの子供のように、泣いている子に

は、シールを貼ってくれへんし、幼稚園に来てはいけないと言うのですか」と泣いていた。それから、何度か、子供が自分で貼らない為、こちらが貼り忘れる事もあり、そのたびに、おはようブックにえんぴつで×印がしてあり、毎日きちっと、チェックしていたようである。

おはようブックのシールに限らず、製作物や手紙類などでも、他の子供が持っていて、自分の子供が持っていないと、目の色を変えて聞きに来た。

そういう日の降園時には、母親自身の機嫌が悪く、普段なら、子供がくつ箱でくつをはきかえることなど、母親が手を出してしてやるのに、逆に、ヒステリックになって、急に子供の頭を思いきりたたいてどなりつけて、帰ろうとする動作をする。すると、Aは、大声で泣き叫んだままである。それで、しかたなく、いつものように、母親が手を出し帰って行く。

家庭訪問で自宅へ行くと、家中の壁・障子ふすまなど、あらゆるところに、らくがきがしてあった。その事について、聞いても、母親は、笑って「Aがしてしまうんです」と、簡単に答えてすましている。「Aは、絵を描く事が大好きで上手なんですよ」と話し、家で描いたという水彩画・クレヨン画など、何枚もつづつ物を持ってきて、1枚づつ説明して見せてくれる。その時も、本当は、Aはこんなにも描けるんだと誇らしげに話し、幼稚園で皆と一緒に活動しないで悪いということを、本人に反省させてない様子である。

すべての事に対して、家ではできる。本当はできるのに、幼稚園では、しないだけだから、仕方がないに、終わらせてしまっている。

幼稚園で何もしなくなったきっかけは、一年前、関西から引っ越してきて、友達の家遊びにいくと、「遊ばない」と言われてから、外に出る事、友達と遊ぶ事をイヤがり、今の状態になってしまったと、話す。

個人面談やふだん、母と話す機会を、なるべく多く持つようにしたが、いつも、一対一で話し合うと、目を合わせることをせず、返事の仕方、こちらが聞いた事に対して、はい・いいえの返事だけであって、自身の考えなどは語らない。そして、途中から、下を向いて顔を上げなくなると、涙を流し、最後には、返事もしく終わってしまうやりとりが多かった。

同じクラスの父兄とのつきあいは、ほとんど持たない。他の父兄は、朝、園内又は道路で会うと、挨拶する気配りを見せているが、Aの母親は、一度として、人と挨拶をした事はなかった。これは、他の父兄との個人面談の時に、耳に入れた話しである。

入園2年目

担任が変わる。

母親に手を引かれて保育室へ。Aに対して言葉でいろいろな指示をする。母親はAを登園させた後もしばらく見守っている事多し。何かをいいたげに、ドアに身体をもたれながら見てい

る。保育者の「こちらにまかせて下さい」の言葉でやっど帰る。

A 相変らず自分から行動を全く起こさない。そのため玄関に来たら「靴をぬいで……靴を棚に入れて……歩いて……」という工合に一々指令をしないと動作は停止する。歩きはじめても、二、三歩毎に声をかけなければならない。手帳にシールを貼ることなどは手をそえてやればする。

全く話さない。トイレに坐らせてもギリギリまでしない。人の話や行動はよく注意している。

新年度になったので担任として保育者は、家庭訪問をした。母親は次のようなことをいった。「東京に引っ越して来て*、近所の家にAがはじめて遊びにゆくと、相手の子供に『遊ばない』といわれてとても悲しそうに帰って来た。それからというもの、外で話をしなくなり、遊びに出かけることがなくなった」と昨年度と同じ話をする。

保育者と母親が話している側で、Aが妹と会話する。この時母親もびっくりして「先生はAの声を初めて聞きますね」と一言うと、Aはしまったという顔をして妹との会話をやめてしまう。

筆者は5月の連休に家族で母の実家に帰る前に面接をする。筆者がAの扱い方に介入したのはこの時がはじめてである。

母の話で、Aは入園1年前まで母の実家で生まれ育ったことがわかった。3才まで大人の中で育ち子供同志遊ぶことはあまりなかった。祖父母が甘やかしたので独占欲・依頼心が強いとのこと。

父親の仕事の都合で関西から東京に移り住んだが、父が東京弁がきらいなので子供たちにも関西弁を話すようにきつくいつてある。（そのためこの一家は東京の家の内外で関西弁しか話さない）

家の中で2才年下の妹とのけんかが多い。これは両親のとり合いから起こる。Aは母親が妹にとったと同じ態度をとってくれと要求する。

買ってほしいおもちゃがあると2時間以上泣いてねだり、仕方がないので泣きやめさせるために買って与えてしまう。こういうことはよくある。

筆者はAの昨年度の様子を色々きいていたのでAのように動作や心の緊張した固い子には小動物を飼うようにしてやるとよいと助言した。その言を入れて、東京へ帰ってくる時にウサギを2匹もって来る。ウサギに夢中になっていると保育者は聞き、一たん幼稚園から帰宅した後、ウサギをもって園に遊びに来るようにさそう。本人、妹、友達の3人で何日か遊びに来るようになる。

* もともと家は関西なのだが会社の出向で一時的に東京に来ている

この時にAはことばを発するようになる。「しない、する、知らない、ミミ、ブッチー、ゆってへん、はっぱ、たんぼぼ、メリー、ちがうわ、おかあちゃん、はよう」などの単語であるが発言をはじめたのである。この状態が3週間つづいたがこれをきっかけに友達関係ができ、よく外へも遊びにゆくようになった。幼稚園から帰って再度来園して遊ぶような時には会話をし、ときどき質問することにも返事をするようになった。又登園した時も、それまでは強制的に指示しないと動かなかったが、これからは手まねきをするとな人で歩くようになった。

この時できた友達関係は、前年他の組に属していた女の子で、この子は動物好きで、また人の目を気にしない自由闊達な性格である。

母親もこの頃から明るくなり、数人の母親達と付き合いはじめる。(母も昨年の自分の子供の組の母親とちがった人々とつきあう)。

しかしこんなこともあった。牛乳屋の小型車が園庭の道いっぱいにはいつて来た。子ども達は一せいによけて散らばったが、Aは道のまん中につっ立っている。仕方がないので車が止ったところ、Aはニヤリとして勝ち誇ったような態度を示めた。意味はよくわからないがとにかく抵抗の意図がみえるのである。

<Aの母と担任との面談の様子>

話し始める前から、下を向き、時には涙を流したり、ハッキリとした態度で面談に望まない。何回か面談する中で話をした事：

Aが泣くのが恐いので、何でも思い通りにしている。

買ってもらいたいおもちゃは、何時間でも泣いているので、負けて買い与えてしまう。

「泣くのをやめ！」といっても泣きやまない。時にはたたいたり、押入れの中へとじ込めたりするが、ダメ！

結局Aの意志を通してしまう。

なおAの母と筆者が面談して、幼稚園へAがはいる前に、幼稚園はどんな所だと話したか、幼稚園にはいる心構えをきびしく教えすぎはしなかったかを尋ねたが、これらに関し口を固く閉ざして答えない。子どもが気にするようなことは指示しなかったかときいても、いったといわないが、いわなかったとも言明しない。

これは隣家の人からきいた話であるが、Aの家の中から聞えてくる声で、「Aなど死んでしまえ」のようなことをいうそうである。それでは憎んでいるのかということ、むしろ溺愛していることは記録の他の部分から読みとれると思うが、幼稚園にもかわいらしい恰好をさせて来るのである。

夏休み後もべつに変化なし

運動会の競技練習が始まる

Aのいるグループの子供達は、初めのうちは何も言わず、すすんで彼女の世話をしていたが、Aの為に負ける事が多い、ということに気が付き、Aに対して攻撃しはじめる。攻撃されている最中、自分の顔を手でポリポリかく。(顔をかくことは自分の行動が適切でないといわかりしかし訂正するまでには至らない——つまりまが悪い時に良く出る行動。小学校の教師も指摘して居られた)

攻撃された後から少々早く行動しはじめる。

運動会の練習において、Aは決して演技せず立っているだけなので、担任と助手が飛箱の両側からかかえて廻転させている。自発性の全くない形式的動作をさせても心理的に悪い結果に導くだけなので、筆者は手助けの禁止を命じ、今後筆者も積極的にAの保育に介入することにきめた*。運動会前後から、幼稚園外では友達と会話をしながらよく遊ぶこと、特異な行動は園内だけであるということをクラスの子供達全員知っている。

ある日、いつものとおり保育に全く参加しないので、「幼稚園に来たくないなら来なくてもよい。来たい時に来ればよい」といってみた。これはAの自由を尊重しての提言である。この言葉に対して何の態度も示さないで、一応Aをつれて筆者が家まで送った。彼女は一言もいわず、彼女の家を知らない筆者を案内して黙々と家に来た。家に来ると、彼女は実際よりもっと年長者のような仕草で器用に門の鍵をあけ中にはいる。母が出て来た様子はといえば、通常の人々なら子供をつれて時ならぬ時に幼稚園の者が立っているから驚いたり恐縮したりの様子を多少とも見せる筈なのに、教師は何しに子供をつれて戻ったのかといった平然とした態度であった。

11月のある朝、皆が外に出ている時、Aがひとり保育室にいて、体操着に着かえていた。筆者が「自分ひとりで階段を降りて、先生(担任)のところにゆきなさい」といい部屋を出した。階段のところに立止っている。「自分で階下にいきなさい」といってしばらくしてからのでくと、階段のところにはいなかった。しばらく経って階下におりてみると玄関のところに立っている。そこで手を引いて走って庭に連れて出た。すなおに筆者と一緒にせい一杯走った。

そこで体操の列にはいるよう指示した。

縄とびの縄をもっては行っていったが、かたくなにつ立ったまま。立っている方向も皆と揃わない別方向を向くことが多い。皆がしゃがんでいる時に立っていることが多い。しゃがませるとのろのろと動作する。縄とびの縄を地からひろうのものろのろ。大波小波でとばせようとしてもせいぜいまたぐ恰好をするだけ。それでいて他の子供のやることは斜の方向からじっ

* 但し幼稚園は日常の中でカウンセリングや治療をするために最適のようにみえるが、どの父母も概してクラスの中で他の子とちがった治療的扱いをうけることを好まないで、そこに限界があるのは残念である。放課後の治療的扱いもこのケースでは好まれなかった。

と観察している。どうするのか覚えようとしている様子である。

保育者たちが話しかけたり、近付いたりすると目をパチパチする。つまり反応しなければいけないという気持がはたらいて、動作にはシカとみせないが注意はむけているのである。

結局なわとびは自分では少しもしなかったが、家に帰ってちゃんと教えられたとおりにするらしい。体操教師も、彼女は体操を決して皆と一緒にしないが、身体的発達には体操をするためにも十分整っているといっている。

体操がすんで皆と一緒に部屋へもどった様子だったが、部屋の前を通ってみると後むきに斜め外を向いて立っていた。しばらく経ってクラスの者が又外に出て、Aともう一人の子と担任とが残っていた。Aは机の前に立ちっぱなし。ところが部屋の前を筆者が通るのに気づくや、急いで椅子のところに走ってゆき腰掛けた。その機敏な動作にはこちらが驚いた。

何日か経って担任は思い切って弾圧的な態度でAに接してみることにし、次のような次第の事があった。

降園時にいつものように何もしない何もいわないので、「帰りたいのなら自分で仕度をしなさい」といったが全く反応なし。Aは、先生は必ず手をそえてくれるというような顔をして聞かぬふりをしている。そこでAを残して全員降園する。

母親に電話をし、どうするのが一番良いかと問うと、

「自分で仕度するまでほっといてください」との答えあり。そのことをAに話すと、ワーワーと大きな声で泣き出す。

「泣いてもダメよ」に対して、「おかあちゃんはよ来てー」と声を出して泣く。これがはじめて幼稚園で話した言葉。

2～3時間同じ状態で立っていたが薄暗くなり、幼稚園での時間的な都合もあるので、手をそえ、担任と共に降園する。家の前で母親迎えるが、やさしい態度でAと接し、

「今日は、おはようを言うと出ていったやろ」

「先生に、さよならは」などといっている。さよならのかわりに担任と握手してわかれる。その翌日もAは平気でやってくる。それで同じ事をためしてみる。

今回は、担任が帰りの身仕度をして、帰るふりをして玄関の近くに隠れていると、A一人で身仕度をして玄関まで出てくる。

この日初めて一人で仕度をして歩く。この日を機会に、一人で保育室に来る。身仕度もする。一人で帰りの仕度をする様になる。数日後、登園、降園時の身仕度は、自分ではなくなったものの、その他は変わらないので、素知らぬ顔をしている時に、担任無言でAの手を引き、外からカギのかかる部屋に入れてみる。ワーワーと泣きさわいでいる。数分後静かになったので中をみると、薄暗い部屋にちゃんと電気を付けて恐くないようにしている。この日より、担任が言葉で指示すると全て自分の事はやるようになる。だがまだ一つ一つ細かい指示を

出さないとやらない。

数日後、Aに対して何の指示も出さないと、担任の目を追い、指示を求める。

「先生は何もいわない、自分でわかるでしょ」という言葉に対して、顔をボリボリかきはじめる。

一步も動かない。

再度、暗いカギ付きの部屋へ、今度は手をしばり入れる。ワーワー泣きさわいで「おかあちゃん、はよ来て」といっている。10分後、出すと、すぐ泣きやみ、「わかっていることは自分でしなさい」の言葉でやりはじめる。

この日を境に、一人で歩く、座る、立つ、弁当を食べる、帽子や服などの仕度を自分でし、園庭にも出てくる様になり、友達に引っぱられながらではあるが遊びの中に入って行く。

ときどき声を出して笑うこともあり、それに気づき、自分でびっくりして、いることもある。

ウサギを1日、2日借りて、クラスの子供達と遊び、ウサギの絵を、クレパスと絵の具で描く。手をそえてあげると、描きはじめ、自分で絵の具の色も選び、初めての大きな作品が描き上がる。A自身も満足している様子。(2枚描く)

運動会のあと、しばらく経って筆者は父親に面接して、次のような事をたずねた。

1. Aのだんまりに心当りがあるか。つまり、幼稚園をおそれるようなことをあらかじめいきかせていたか。これに対しては母親同様要領を得ない回答であった。幼稚園にはいる以前にどんなことを話したかについても答が得られなかった。
2. 母親が子どもに対してどういう態度をとっているかをたずねると、ヒステリー気味に怒ると話した。(このことは先に述べたように隣人も同じ感想を述べている)しかしとてもかわいがることも事実である。
3. 父親は自分はAと似ていると思う。しかしAからは親しまれていないと残念がって語った。そして子供達と遊んでやりたい気持ちが十分うかがわれた。

運動会の日も、Aは何一つ演技せず、出場してもその場に立ったままであった。父親も運動会に来て教師たちに挨拶しない。Aの幼稚園における行動を少しも気にしていない。

11月頃から、母親はAをいろいろな児童相談所につれてゆく。やはりAのことが小学校入学を控えて心配になってきたらしい。

しかし基本的には、Aは東京に来たから変ってしまったのであって、東京の生活は本来Aの家庭にとって不自然なものであるのだから、関西に戻ればAの行動もすっかり直ると思っている。このように絶えず思っているに違いないし、幼稚園でそう明言している。

冬休み後。

保育室に入って来たAに、「おはよう」といつもの様に声をかけると、「おはよう」とこた

える。どうやら母親と休み中、練習して来た様子である。「さようなら」も同じようにこたえる。担任とだけではなく、クラスの子供達にも同様に答える。

一斉活動の際には、個人的に指導をしなくては行動をしないものの、生活においては、他の子供達よりも正確に、ていねいにする。3月に入ってから担任と交換日記をはじめ。その中でいろいろ質問をすると、その答えを書いて、必ずその日のうちに幼稚園にもってくる。但し書く内容は母の指令によって書かれている様子。

今までは、幼稚園に来る時は、必ず友達と一緒にであったが、一人で来れるようになる。

3月のある日身体検査を行なった。相変らずAは着物をぬぐのに一番あとまで残る。シャツをぬぐと、それを膝の前にひろげて下げ、前かがみになり、ずっとそのままの姿勢でいる。こちらが次々動作を指令すると従うが一々のろい。上述のようによくなった面もあるが、このような相変らず偏奇な行動が多い。

この2年間望ましい行動はクラスの友達が認めて賞讃するようにし、望ましくない行動は友達からも自然に否定され、教師たちも相当きつく罰するなどの正負両様の強化を生活の中で行ってきた。

又両親への提案もいろいろ試みたが卒業式の日Aの態度がまた彼女らしく象徴的なものであったのが、さびしく心残りである――

すなわち、卒業式場で修了証書もらいにゆくの一人一時間の時間をかけ、全く気ののらない態度であった。そして式が終るとその証書を自分の坐っていた椅子の下においたまま退場した。

われわれの幼稚園での行動記録はこれで終る。父も母も東京は仮の住まいであるので、Aは関西に戻れば正常になると思い、人にもそういつているのを私達はきいている。

Aの適応的な生活を心から願う一方、心理学的な関心から小学校入学と同時に関西に帰ったAがどのように生活しているかを追跡することにした。そこで1983年夏休み、(Aの1年生当時)と1984年秋(Aの2年生当時)の二回小学校を訪れて担任教師と話合った。一回目は幼稚園年長組当時の担任と筆者、2回目は筆者が出向いた。

1983年の小学校 小学校では、名簿を呼んでも返事をしない、動かない、教師の質問に答えない生徒が入学して来たので驚いたらしい。試験をしようとしても決して書かない。仕方がないので家で書いて来なさいというと100点の出来栄の答案をもってくる。弁当を食べないので担任(男性)が一々口に入れて食べさせる。トイレにゆかない。連れていってもそのための姿勢をしないので強制的に坐わせる。こういったことは幼稚園当時とすべて同じか、若しくは、退歩している面もある。隣席には面倒みのよいよく出来る男の子を配してある。ところがその子にAがいじわるをしたので、担任は日頃親切にしてくれる友達にそんなことをしてはい

けないとひどく叱りつけた。ひどく叱ったことはAによい結果を与えたと思うとのこと。つまり、少しはすなおに従う様子を見せるようになったということであった。

しかし彼女の行動には人をばかにしたように感じさせるものがある。ふてぶてしさといった感じがある。

教科書を自発的に開くことはないが、いざ開けばいつもまちがいがなく正しいところを開く。

運動が苦手で水泳を夏休みにやっているが、2週間ある練習に3日しか出席しない。が、トランポリンは好きのようである。

小学校側では母親についての批判がきびしいようであった。祖母の方が話がわかるという。

母はAのことが心配で教育相談にいったが、そこでAについての社会性発達調査に応じたようである。すると母親はAに関するどの質問項目にも○印をつけ、中学生でなければできないような段階までAが出来ることにしていた。

担任の教師のところに来ると下を向いて泣き出して話ができない。教育相談にまずいってもらいたいの母親の方であるとのことであった。

筆者が東京ことばを避けて関西弁のみを一家が話していたと語ると、しかし母親のことばは東京弁の影響をうけている。例えば「しちゃった」などといっていると笑っておられた。

1984年の小学校

母親は相変わらず子どもについての注意をきくと泣きそうにして下を向いてしまう。学校は制服制であるが、子供が制服をいやがって着ない日は私服を着せ、制服を持ってついて来て学校で着かえさせている。また子供がほしいといえれば何でも買ってやっている。結局何でも子どものいうとおりに屈服している。これでは親の権威はないと評し、学校側では食べない時、叩いたりおどしたりして子どもを従わせているが、その方がいいと思うといわれた。

又母は学校で子どもと一緒に面接すると、そばに坐っていて一々口出しし、指図をしている。又、東京の幼稚園の先生が親切にしてくれなかったといっているとのこと。(母親が東京で知り合いになった父兄には、東京の方がよかったといっているそうである)

現在家庭でこの一家は二階に住み、階下に祖父母がいる。二階と階下で電話を別にして暮している。母は姑に従わないで、子どもには絶対服従である。姑に黙って子ども達を連れ自分の実家に帰ったりして家内の問題をひきおこしたこともある。結婚して姑と同居するとは思わなかったらしいとのこと。

学校活動に母親は絶対参加しない。

こちらに来てもなお子どもが緘黙なので、母ははじめていよいよ問題だと思ったそうである。

小学校担任が、歯医者でA親子に会った。Aはにこにこ母親と話をしていたが、担任教師をみつけて急に固く黙ってしまうということもあった。

二年になってからは試験にも応じているし作文も書いている。この頃では他の子達と同様一年の時の羅列的文章とちがって自分の気持ちを書き入れるようになっていく。国語はよく出来て成績は五指にはいるとおもうとのこと。算数は二年になり少しむずかしくなったと思っているようである。

自分のものの片付けは人一倍きちんとしている。体育がだめで、体操はしない。ちゃんとできることはやるけれども、できないことは全くしないというふうである。

〔考 察〕

本児のばあい、一定の環境刺激に応じ、一定の特色ある反応がおこる。幼稚園における刺激の傾向は比較的きまっているのので、彼女の場合環境的刺激に対し、反応が予測されるほどである。彼女の「何もしない」というだんまり及び無行動は、表面非常に消極的なようであるが、強い緊張をとまなう抵抗もしくは攻撃をさえ秘めていることが、筆者にも、幼稚園の教師にも、又小学校に移ってからの担任にも感じられるのである。無行動もしくは奇異な行動を「してみせている」といった方がよい。家庭で思わずしゃべっているところを幼稚園の教師に見られていることに気づいて、しまったとハッとしたり、歯医者さんの待合室で小学校の担任も来ていることを見て急に固くだまってしまったりする。これらの時の様子を考へても、しゃべる場合と、緘黙の場合を相当意図的に明確に区別しており、ふつうに見られる場面緘黙症状の選択性とはまたいささちがうのではないかという気がする。何故なら、思わず知らず幼稚園教師の前でしゃべって、はっとしてやめるといふのは、ただだらだらと緘黙に落ち込んでしまうといふのは異なる。

牛乳屋の車をとめさせた件などに、表面的な攻撃さえうかがわれる。このことからみて、Aの緘黙は、言葉の代りとしての積極的な行動的意味を常にもっているように思われるのである。

彼女は保育中何もせずにクラスに半ば背を向けて立っていても、クラスの中で何が行われているかを逐一観察して、教わった行動を身につけたいと思っており、家に帰り復習しているのである。つまり保育活動から逃げるどころか心は積極的に参加している。

その点、佐藤⁽²⁾が「緘黙は極度の羞恥心、憶病さないし退避傾向をもつ。非社会性、内向性、刺激過敏感、自我の脆弱などが性格特性として指摘でき、その形成には環境的要因のみならず、体質的要因の存在も全面的には否定し得ない」と述べているが、Aの自我は脆弱でなく、潜在的に強く育って来ていると思う。非社会性ということも表面的にはそうかもしれないが、年齢なりに人間の社会関係についての知識を案外心得ていると筆者はみる。

記録の流れにみてもわかるように、彼女のばあい、強圧的なほどに厳しく指導するとき、きまってその後の進歩に著しいものがある。

さてAと母との関係であるが、前出の記録からみて母は不安定の性格のようである。どういふ事情あつてか婚家先の両親との同居を好まず、一家は東京へ来るまでは母の実家にいたようであ

り、今回郷里に帰って姑たちと住むとは思っていなかったとっているそうである。夫の両親に対するそういった態度の反動として、母親はAの要求どおりに積極的に物を買って与えたり、幼稚園での行動をいちいち指図して彼女に過度に関わっている。Aを自分の内にとりこんでしまっているのではないだろうか。佐藤⁽²⁾は「家庭は緘黙傾向の存続、強化要因としても無視できない。すなわち形成要因としての家庭内人間関係の型にかかわらず、一様に Client に従属的、代行的である。従属とは非社会性、内向性の Client をそのまま受容することであり、代行的とは社会的対決を求められる場面で親が Client の代わりに行動することである」と述べている。Aの母の場合、意味内容はちがうように思うが確かに従属的、代行的ではある。

こうして母はAと一体になったつもりで、姑への不従順さを補償していると思う。

ところでAにしてみれば、親の勝手に動かされていることになる。外部に落度をみせて葛藤状況に陥りたくないという両親の気持、方針が子どもに反映しており、子どもはそれにもとづいた行動形式に同一化している。

子どもというものは、幼児童期に親に同一化して、自己の同一性を得る基盤を培う。つまり自分が生れ落ちた社会にきちんとはまりこみたいための一番手近で確実な手段として親との同一化を行なう。ところでAが親を模倣しても、A一家には住む社会に合わないような生活態度があることを、子どもは敏感だから当然見抜くであろう。自分がはまりこみたい社会に親が適応的にはまり込んでいないことは不協和な齟齬として感じられてくる。しかしAは幼いから被護してくれている親の模倣をしなければ親から反対を食らって生きてゆきゆけない。Aは同一性に連らならない同一化のために悩んでいるといえる。

Aは多分知能優秀で（緘黙で知能テストができなかったが、幼稚園生活及び小学校教師の言からして優秀ではないか推察できる）自我も弱くない子であるから、自分らしい生活をしたい欲求と、その未熟な欲求を軌道修正してくれる筈の親への同一化の必要性と、しかしこの親への同一化は家庭で自分を助けてはくれても、この社会に根を下ろすべき同一性に連らなりにくいものがあることの認知と、その3つの事情の相剋の故に、奇異な行動をし乍ら彼女の精神発達程度としてはこれしかできないというせい一杯の意地と防衛をして見せていると感ずるのである。

〈結び〉 われわれの緘黙症の例ははっきりした特徴のあるものだと思う。はっきりしているだけに、まわりの者が原因を推測してその除去につとめるよう心掛ければ症状も快方に向い、必ずAは相当早く精神的に健康な子になるであろうというのが筆者の観測である。

幼稚園記録のある部分は東京都内幼稚園の教諭、三沢篤子、岡野紀子両氏によるものである。

引用文献

- (1) 内山喜久雄「小児緘黙症に関する研究」北関東医学, 第9巻第4号, 1959
- (2) 佐藤修策「場面緘黙の形成と治療」臨床心理, 1963, Vol. 2, No. 2